

高橋さんは、長野県飯田市役所で、りんご並木の再生や飯田まちづくりカンパニー、飯田方式と言われる小さな再開発、住民協働のまちづくりを推進されてこられた方です。退職後は、和歌山県高野町副町長としても力を発揮されてこられました。また歴史・民俗にも造詣が深くアヲハト会という読書サロンを主宰されています。

高橋さんの論考は圧巻の内容でした。清内路というむらのくらしが今後の社会の可能性のヒントを与えるものだという指摘でした。

高橋さんが通い続ける長野県阿智村清内路（旧清内路村）は、共同体の精神が今も残る村だという。再生産が可能な技術やくらしの知恵が息づいているからこそ、21世紀は山村のあり方が見直され、輝く時代になる。今風に言えば、ソーシャルキャピタルの再評価ということにもなるだろうか。文章では個別の話題には言及されていませんが、生産活動として「奉納煙火（手作り花火）」（住民が火薬から手作りする300年余の伝統）の存在が、大きいのではないかと感じています。近代化は、利便性や豊かさをもたらしたが、失われたものも大きかった。物質的な豊かさはもたらされたものの、人々の濃密な関係は希薄化し、ややもすると孤立してきてしまった。村のくらしに、都市とは異なる豊かさを見出している。それは、市場経済では測ることのできない安心感だということです。これは、GDPではなくGNH（国民総幸福度）にもつながる指摘と考えたい。今でも村では暮らすための「生きる力」が育まれているということです。村での「丁寧な暮らし」が、地域の自立、いや自律を支えているのであろう。ゆくゆくは、食料とエネルギーを地域で自給できる集落を目指すという目標、その気持ちは、食料安全保障が叫ばれ始めている中で、素晴らしいと考えます（飯田市では「エネルギー自治」の取組が進んでいるので、そうした知識の交換もされていると感じます）。外部の力に依存するのではなく、地域にある資源を可能な限り活用するくらし方を再構築する試みでもあります。そのためには、共同体が保有していた共有ではなく、「総有」の意識を村人それぞれが持ち続けることが、農的くらしを担保し、地域の自立を持続させることになるのだろう。

過日、掲載しました吉田正樹さんの近江八幡市では、古くから日牟禮八幡宮の八幡祭があります。中世・近世では、どの集落でも水飢饉の時には、水争いが起こっていましたが、この近江八幡では、古文書によれば争いが少なかった地域であることが分かっています。その原因を探したところ、争いが起きにくい社会的仕組みがあったとされています。どうも祭り組織と自治会組織が複雑に入り組んでおり、ハレとケの心情が用水の上下取水対立を起こしにくくする仕組みがあったという研究結果があります。安定的な村には、何かしらの装置が働くようになっているとも感じます。山村のくらしも、都市生活からみて、納得し理解できる仕組みの説明や価値を提示できるかによって、大きなうねりともなる気がします。

21世紀は、「開拓の時代」という指摘は、時代を喝破されていると感じます。卑近な動きとしては、総務省がはじめた「地域おこし協力隊」が徐々に発展、地域への影響も大きくなってきました。都会にいた若者によって、農山村や地方都市の疲弊した状態は、逆に、若者の可能性や個性をいっそう発揮させる場にもなっており、疲弊地を元気にする開拓の場でもあったとみることができるでしょう。

また総務省や農水省の後押しで、「地域運営組織」という地域持続のために既存複数集落の組織化が

図られてきています。阿智村の清内路でも、2つの集落を1つの組織として振興が図られているようです（もともとは、上下の清内路諏訪神社があるので2つの自治組織になっていたと思われます。なお、お寺は青南寺（浄土真宗、1つの共同墓）、後に念仏堂（浄土宗）ができています）。こうした組織化の取組は、清内路の村の活性化にどのように効果を発揮していくのかは気になるところです。